

音楽科の主張

1 教科で育みたい人間像

音楽科では、「**進んで様々な音や音楽のよさや美しさを味わい分かち合える人**」を育みたいと思います。なぜならば、自ら感動を求め、多様なよさや尊さに気づき尊重し合える感受性豊かな人でいてほしいと考えるからです。

音楽は、音を媒体としたコミュニケーションで、そこには「つくる人」（作詞・作曲者、ある楽器をつくった人、ある音楽文化を生み出した民族など）「演奏する人」「聴く人」が存在します。そして、それぞれの人が様々な思いや意図を抱きながらそのコミュニケーションに携わっていて、音や音楽を通して表現したり、感じ取ったり、伝え合ったり、共有し合ったりします。「つくる人」同士、「演奏する人」同士、「聴く人」同士のコミュニケーションに加え、それらの立場の枠を越えたコミュニケーションもあります。音楽をより深く味わって楽しもうとする程、枠を越えたコミュニケーションが充実して営まれていくのではないのでしょうか。

例えば、ある音楽を「演奏する人」たちがいたとします。「演奏する人」たちは、その音楽を生み出した「つくる人」の思いや意図に気づかず演奏することもできます。また、「聴く人」たちがどう感じ取るかを意識せずに演奏することもできます。

しかし「つくる人」の音や音楽にこめた思いや意図の真意をつかもうとしたとき、また「聴く人」たちの心がどう動くかに思いを馳せたとき、「演奏する人」たちは音や音楽をより深く味わっていきます。そして、奏でた音楽から様々な思いや意図を他者と共有し合えたとき、大きな喜びを味わっていくことでしょう。

これらのコミュニケーションの中核には、音や音楽に対する感性、つまり音や音楽のよさや美しさなどの質的な世界を価値ある物として感じ取るときの心の働きがあります。音楽は、音色やリズム、旋律などの諸要素から構成され、様々な特質や雰囲気を生み出します。それらを感じ取る心の働きを大切にしながら音を媒体としたコミュニケーションを進んで図るとき、多様なよさや尊さに気づき、人々の感性はより豊かになるでしょう。

このようなことを踏まえ、音楽科で育みたい人間像を「**進んで様々な音や音楽のよさや美しさを味わい分かち合える人**」としました。自分なりの感性を大切に、他者の思いや意図、様々な音楽文化の価値やおもしろさも感じ取って、それらを尊重し合いながらコミュニケーションを取ることができる人になることを願っています。

2 育みたい人間像に迫るために教科で大切にすべきこと

まず、音や音楽のよさや美しさを味わっていくために、「**音や音楽に対する感性を豊かにしていくこと**」を大切にしたいです。そのために、「つくる人」「演奏する人」「聴く人」の立場の枠を越えたコミュニケーションの充実を図っていきます。歌唱、器楽、創作、鑑賞の各分野にバランスよく取り組めるようにしたり、各分野を関連づけた題材展開を構想したりすることは、子どもたちが様々な立場で音楽に携わり、ある立場に立ったときに異なる立場の人の心の動きに思いを馳せていくことにつながるでしょう。これらの活動の柱となるのが、音や音楽がどのように形づくられているかについて、要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受していくことです。「何となく」ではなく、視点をもって音や音楽をじっくりと味わっていけるように授業構想を工夫していきます。

しかし、様々な音や音楽を進んで味わい分かち

合っていくためには、表現することをためらってしまったり、様々な音楽のよさや美しさを感じ取ることに見切りを付けたりせずに、心を開放して音楽活動に関わっていくことが大切です。「**心の開放**」は、音楽活動を通して喜びを味わっていく経験の積み重ねによって促されるでしょう。音楽活動を通して味わうことができる喜びには様々なものがあります。仲間とともに作りあげる喜び、自分のよさを発揮できた喜び、お互いを受け入れ合えた喜び、表現できるようになった喜び、気づき感じ取れた喜び、共感し合えた喜び……これらの喜びは「もっとやってみたいな」「もっと聴いてみたいな」といった思いを引き出してくれます。

以上のことから、「**進んで様々な音や音楽のよさや美しさを味わい分かち合える人**」になってほしいと考える音楽科の授業では、「**音や音楽に対する感性を豊かにしていくこと**」と「**心の開放**」を目指して授業実践を重ねていきます。